

欧州向け道産品に活用も

札幌 中国海運幹部が講演

北極海航路

アジアと欧州を北回りで結ぶ「北極海航路」での運航実績がある中国海運大手の中国遠洋海運集団(コスコ・グループ)の幹部2人が24日、道内入りし、北大で同航路の利点や今後の展望について講演した。25日には苫小牧港を視察するほか、北大の専門家らと交えた意見交換会にも出席し、同港の中継港としての可能性を探る。道内経済界や港湾関係者は官民挙げて寄港を要請する構えだ。

訪れたのは、欧州航路担当責任者の趙英男氏と上海地区担当責任者の李堅氏。講演は北大など国内3研究機関でつくる「北極域研究共同推進拠点」の招待で実現し、学識経験者や報道関係者ら約130人が参加し

た。趙氏は、2013年から計9回にわたる北極海航路の航行実績を説明し、「(スエズ運河を経由する)南回り航路に比べて航海日数を12日間短縮でき、台風やサイクロンの影響も受けな

い」とメリットを強調。長期間の海上輸送で劣化しや



コスコ・グループの幹部から北極海航路のメリットについて話を聞く参加者ら

すい鋼材などを運んでいる現状にも触れ、「北海道の水産品や農産加工品などの運搬にも利用できる」と、欧州向けの道産品の輸送にも適しているとの認識を示した。

李氏と趙氏は25日、開発局や北海道経済同友会、北大の北極域研究センターの関係者らと札幌市内で会談し、北極海航路の活用で道内港が果たす役割について意見交換する。

その後、苫小牧港を訪れ、主要施設を視察するほか、同港の利便性や寄港のメリットを地元港湾関係者から聞く予定だ。